

今回は「小学校体育大会」についてです。今年は、多くの声援のもとで開催されました。仲間の心に届くように、身を乗り出して声援する子供の姿がたくさん見られました。

## 「心に火を」

岡崎市立梅園小学校 武谷 依里香

私の目標は、子供の心に火をつける教師になることだ。今大会に臨む子供の姿から、目標を再確認した。

「勝てるかなあ。」「あんなに差がつくのはいやだな。」他校の試合を見ながら子供たちが話していたのを聞いた。目標は優勝と言っているものの、今の自分たちの力では難しいということを感じているようだった。そんな子供たちに私は、「泣いても笑ってもこの時間は最後だから楽しもう！」と言って送り出した。

試合が始まると、子供たちは積み重ねてきた練習の成果を発揮した。1プレーごとに挙がる歓声と沸き起こる拍手に、会場の熱気が高まっていった。練習試合とは違い、途中で悔し泣きをする子もいなかった。必死にボールに食らいつき、離さない。誰一人としてあきらめなかった。想像以上の子供の動きに、私も心を動かされた。興奮のあまり、思わず顧問3人が立ち上がってしまうぐらいだった。

第4クォーター。「いけるよ!」「いける、いける!」と声をかけ合う子供たち。試合前の様子からは考えられない言葉に、さらに子供たちにパワーがみなぎっていたことが分かった。周りの声援によって、子供の心に火がついていくのを実感した。

子供の行動に、私の心も動かされた大会だった。私は、子供の心に火をつける教師になりたい、改めて強く思った。



## 「全員で」

岡崎市立連尺小学校 光田 理菜

「仲間にたくさん声をかけよう。」練習中、子供たちに何度もかけてきた言葉だ。今年の6年生は17人。どんなことにも一生懸命頑張れる子供が多い。部活ノートを自主的に書いたり、ルールを積極的に聞いたりして、毎日の練習を一生懸命頑張っていた。そんな頑張り屋の集まるチームだが「声が出ない」という課題があった。ピッチャーが苦しんでいるときやエラーがあったときに励まし合ったり、得点圏にランナーがいるときに状況を共通理解したりする声が必要となる場面はたくさんある。しかし、どの場面でも、十分な声が出ず、それぞれが個人で戦っているようなチームだった。そこで、キャプテンを中心に「どうすれば全員で戦えるチームになれるのか」を考え、互いに声をかけ合っていくことになった。しかし、子供たちにとって声をかけ合うことは容易ではなかった。どう声を出すのかとまどっている子供たちに対して、私が率先して出すようにした。点を取った時の喜び方、ピッチャーへの励まし方などを伝え、自信をもって声をかけ合える雰囲気を作った。すると、子供たちもだんだんと自分から声が出せるようになってきた。中には、かけ声を自分で考える子供も出てきた。

迎えた最後の大会。選手として出ている子供も、選手ではない子供も、全員が声を出し、仲間の活躍を喜び、自分たちでチームを盛り上げ、全員で戦っていた。子供は、守備も打撃も不安でいっぱいだったはずだが、常に笑顔がはじけていた。今まで一緒に努力してきた仲間の存在を声で感じ、支えになっていた。最後まで全員で戦い抜いた子供たちは誇らしげだった。

教員2年目、ソフトボールの難しさ、チームを作っていく難しさなど様々な壁にぶつかり悩まされてきた。しかし、子供とともに乗り越えてきたからこそ全員で戦い抜くことができた。「全員で戦えるチーム」となったことを私は誇りに思う。



## 「チーム一丸となって」

岡崎市立井田小学校 尾張 早苗

長くバスケットボール部の顧問をしていて、毎年心がけていることは、「自分で判断して動く」「感謝の気持ちをもつ」チームをつくることである。小学校の部活動は、プレーの上達はもちろんだが、礼儀やチームワークなどを身に付ける場だと考える。毎年20名以上の入部があるが、いつも私は、挨拶や荷物整理、率先した準備片付けを徹底するよう指導している。今では、片付けてから体育館を出るまで、5分もかからない。どんな片付け方をしているかを見ることで、子供の性格を捉えるきっかけにもなる。

新チームが発足してから、子供の中に部活動に対するモチベーションの差があると感じた。このままではチームが一つになるのは難しいと思った。そこで、練習中はお互いに励ます声をかけ合い、友達のプレーをしっかり見ることを意識付けた。大会が近づくと、ベンチ入りした子供に責任をもってプレーする大切さを伝えた。ベンチメンバーになれず、一度もユニフォームを着ることなく引退する子供のことを忘れずに一生懸命プレーしてほしいと思ったからだ。また、ベンチ外の子供には、応援で盛り上げ、必死に戦う選手の後押しをしてほしいと伝えた。コロナ禍が開け、何年かぶりに代々伝わる応援の仕方を教えた。一人一人に役割をもたせたことで、プレーをただ見ただけだった子供が、練習のときから大声を出して応援をするようになった。チームのまとまりが感じられるようになってきた。

6年生にとって最後の大会。子供は、市内小学校バスケットボール大会や市民選手権のリベンジを誓って試合に臨んだ。しかし、1日目でエースのA児が負傷して出場できなくなったため、チームに暗い雰囲気になった。それでも、交代で入った選手が必死にディフェンスをし、抜かれたときは更に次の選手でカバーをし合うという姿があった。2日目、A児がベンチ入りすることはできた。一番悔しい思いをしているだろうA児だが、アップ中も作戦の話し合い中も一番声を挙げていた。ベンチで応援するメンバーは、喉が痛くなるほど必死に応援をし、プレーをしている選手を盛り上げた。チームが一つになっていると感じる瞬間だった。

試合は残念ながら負けてしまった。多くの子供が悔し涙を流していた。みんなで一緒になって戦ったからこそその涙だろう。控室では、頑張ってきた自分を褒めてほしいこと、友達や保護者、先生という様々な方の支えがあって喜びや悔しさを味わえたことを子供に伝えた。子供には、これからも感謝の気持ちを忘れないでほしい。



### 体育部自主研修会「論文の書き方」開催

12月12日(火)岡崎市総合学習センターにて開催し、37名の先生方が参加をしました。本年度は、福岡中学校の大野孝輔指導員が講師を務め、資料を使って、基本的な書き方や要点となるところについての講義がありました。

研修では、仮設と手だてのつながりを考える演習を行いました。自分の考えをもち、活発に意見を伝え合う先生の姿がありました。また、研修後には、指導員に質問する先生の姿もありました。



次の自主研修会は、3学期に「がん教育」を予定しています。詳しい案内は、体育主任宛てに追って連絡します。参加を希望される方は、各校の体育主任に申し出てください。多くの方のご参加をお待ちしています。